

池内紀 × 川本三郎

にっぽん そぞろ歩き

第15回 食の風景、喜怒哀楽



子供のころに食べたもの、映画や小説、エッセイに登場する印象的な食の「コマ」、食が生む悲喜こもこも食を通して見えてくる人となり……。グルメではないとおっしゃるお二人ですが、食の話は尽きません。一つの話題がまた別の話題を引き寄せ、話がどんどん広がっていきます。

奇妙なかたちの欠食児童

編集部 今号では「食あれば人集う」と題し、「こども食堂」のような、食を通じた拠点づくりや社会活動に焦点を当てる特集を企画しているので、お二人にも食にまつわるお話をうかがえればと思います。

池内 「こども食堂」の背景には、貧困のほかに、親による育児放棄なんかもあるんですか？

編集部 どちらの問題も、「こども食堂」が生まれた経緯に深く関係しています。

川本 「こども食堂」をやっている学校なんかは、ないんですか？

て、麦飯の子供は周りにはほとんどいませんでしたけど、あれくらいでも十分おいしかったです。みんな貧しかったから、貧しいこと自体がどうとは別に思わなかった。

川本 欠食児童という言葉が戦前に生まれましたが、昭和二十年代にも流行りましたよね。戦後の食糧難で満足に食べられない子供がたくさんいました。

池内 現代の「こども食堂」へ来る子供たちは、奇妙なかたちで現れた欠食児童ですね。

川本 一方では飽食の時代と言われて、テレビをつければグルメ番組があふれ返っている。

池内 食そのものがあふれ返っていて、コンビニで廃棄される食べ物なんて相当な量でしょう。

川本 「こども食堂」ではありませんが、私が以前通っていた歯医者の女医さんが一人者で、お昼に仲間とお惣菜なんかを持ち寄って食事をする会を開いていたんです。「川本さんもお一人だから、来ませんか？」と言ってくれるので、ときどき混ぜてもらっていました。先日会った五十代の女性編集者は、同世代の独身女性同士のいわゆる女子会で、一年に一回、カニを食べに行く旅をするんだと言っていました。それで毎年

編集部 まだないようです。

池内 学校には来たけれど、お昼に食べるお弁当がなくて、その時間になると姿をくまます生徒が、ほくの子供のころにはいました。開高健は、自分がまさにそういう子供だったころのことを、エッセイに書いています。お昼になると、仰向きになって水道の水をわーっと飲んで、そのときにズボンのベルトをぎゅっと締める。そうすると、しばらくは満腹のように感じる。彼が育った大阪では、それを朝鮮語かなにかで「トトチャブ」というそうです。あるとき廊下で、韓国人の同級生が、通りすがりに、「トトチャブはつらいやろ」とささやいた——そんな痛切な思い出です。

川本 土門拳が昭和三十四年に出版した『筑豊のこどもたち』で話題になった写真を思い出します。昼食の時間に、お弁当を持ってこれられない子供たちが、周りでお弁当を食べている姿を見ないように本を読んでいる。あの写真は、強烈でした。お弁当の時間になると外へ遊びに行ってしまう子が、私の子供時代にもいました。

池内 ほくは家が貧しかったから、子供のころのお弁当は麦飯でした。麦飯に塩昆布がべたっと乗せてあつ